
アライグマ被害対策マニュアル



令和5年

山口県農林総合技術センター

目次

1 アライグマとは.....	1
(1) 分類.....	1
(2) アライグマの侵入経歴.....	1
(3) 分布.....	2
2 アライグマの生態.....	3
(1) 形態.....	3
① 体の測定値.....	3
② 雌雄の見分け方.....	4
③ 各部位の特徴.....	4
(2) 繁殖特性.....	6
(3) 食性（胃の内容物）.....	6
3 事前調査.....	7
(1) アライグマの痕跡調査.....	7
① 足跡の調査.....	7
② 爪痕の調査.....	8
③ 食痕の調査.....	9
(2) 加害状況の把握.....	11
① 加害獣種の把握.....	11
② 侵入場所の特定.....	11
(3) 自動撮影カメラによる調査.....	12
① 自動撮影カメラとは.....	12
② 自動撮影カメラの選び方.....	12
4 防除方法.....	13
(1) 防護対策.....	14
中型獣&サル複合型電気柵（山口式）.....	14
① 設置場所の注意事項.....	14
② 電気柵の通電の仕組み.....	15
③ 設置方法.....	16

④	マイナス（アース）棒の取り付け方法.....	16
⑤	電源および出入り口通電.....	17
⑥	設置時間および仕様.....	18
⑦	実証試験結果.....	19
(2)	捕獲対策.....	20
①	捕獲方法.....	20
②	捕獲期間.....	22
③	捕獲場所.....	22
④	捕獲用の餌.....	23
⑤	慣らし期間.....	24
⑥	捕獲後の処分方法.....	24
(3)	生息地管理.....	25
①	防護柵と隣接する防風林.....	25
②	低い電気ネット柵の内側の樹木.....	25
③	廃屋の周辺の手前刈り.....	26
5	関連法律.....	26
(1)	特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律.....	26
(2)	鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律.....	26
6	引用文献.....	26

1 アライグマとは

(1) 分類

哺乳綱食肉目アライグマ科アライグマ属

学名：Procyon lotor 和名：アライグマ



(2) アライグマの侵入経歴

1962年 愛知県犬山市の動物飼育施設で飼育されていた12個体が脱走し野生化した。

1970年代 テレビアニメの影響で全国に2万頭以上が輸入された。

1980年代 成獣の凶暴化、脱走の事例が多発し、日本各地で野生化した。

1990年代 農作物被害や家屋侵入が日本各地で社会問題となった。

2000年代 狂犬病予防法により輸出入の際に検疫が義務化され、輸入量が大幅に減少した。

農業被害額が1億円弱にのぼる。

特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律が公布された。

2010年代 被害額が3億3千万円を超える。

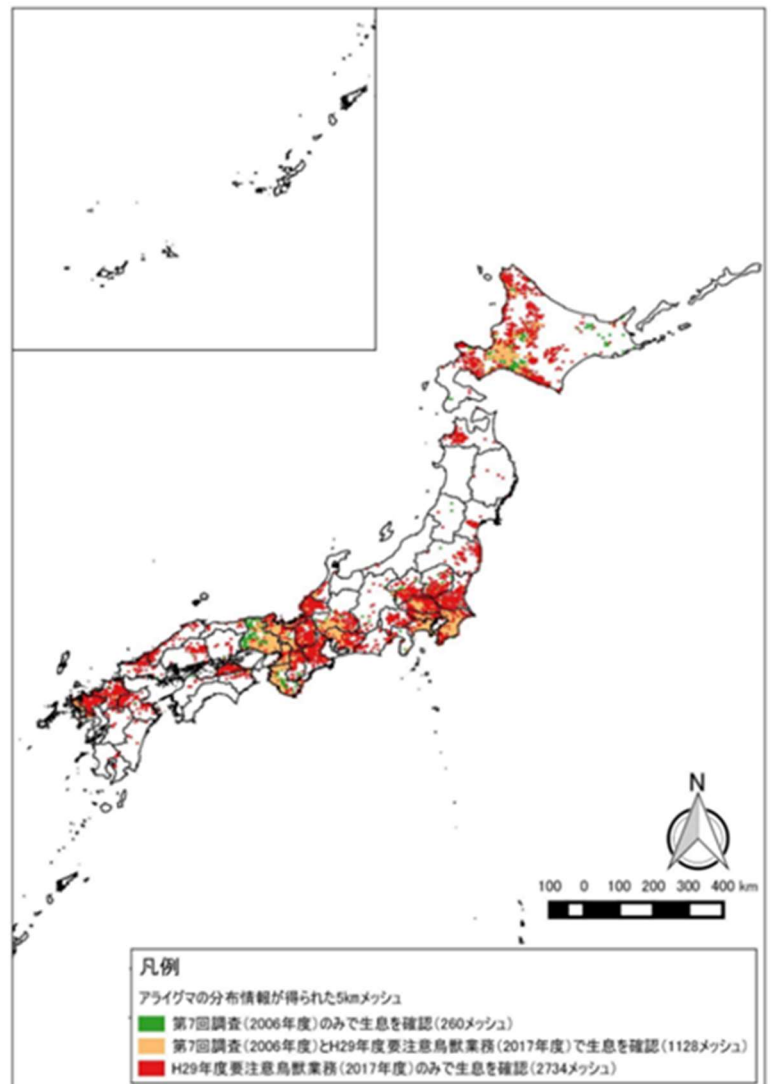
(3) 分布

原産地は、アメリカ合衆国、エルサルバドル、カナダ、グアテマラ、コスタリカ、ニカラグア、パナマ北部である。分布の北限はアメリカ合衆国南部であったが、農地の拡大等によりカナダ南部まで北上している。ヨーロッパには1930年代に毛皮獣として移入され、ドイツ、フランス、ベラルーシ、アゼルバイジャン、西インド諸島に定着している。日本では1962年に愛知県犬山市で野生化が始まり、1977年にテレビアニメによるペットブームが起り多く輸入され、それに伴う逃亡や放獣により野生化した。

2006年度と比較すると、2017年度の調査では分布範囲が著しく拡大している。北海道、青森、宮城、福島で拡大し、関東、東海、近畿地方の全域で確認されている。中国、四国に続いて、九州の北部から分布が広がりつつある。

山口県においては、萩市の2009年の初目撃から分布拡大を続け、全県で目撃されている。山間部のみでなく、都市部においても河川を移動し、廃屋や納屋に入り込んで繁殖している。既に分布している地域で生息密度が高まるにつれて周辺地域へ拡散し、農業被害だけでなく家屋への侵入被害が発生する恐れがある。

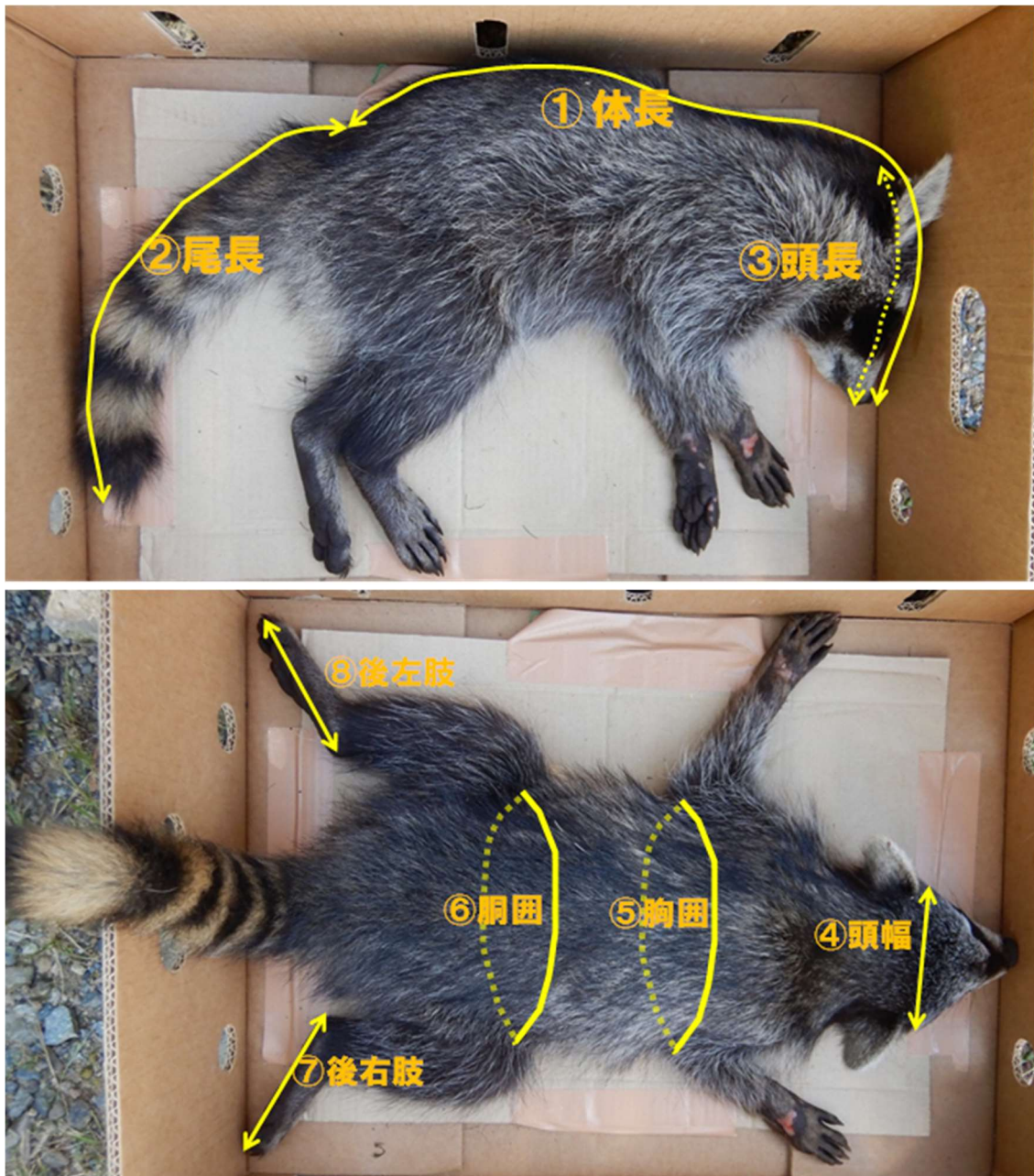
出典：環境省ホームページ (<https://www.env.go.jp/>)



2 アライグマの生態

(1) 形態

① 体の測定値



平均体重は、雄が 4.88 k g、雌が 4.40 k g であり、雄の方が 10%程度重い。

胴体の長さとおよび肢長（①、⑤、⑥、⑦、⑧）は雄の方が大きい、頭部の長さとおよび尾長（②、③、④）は雌の方が大きい。

山口市および萩市で捕獲した個体の計測値

計測項目	雄	雌	平均
体重(g)	4,876.4	4,396.7	4,660.5
① 体長(mm)	588.3	574.4	581.4
② 尾長(mm)	248.9	270.6	259.8
③ 頭長(mm)	143.5	146.0	144.8
④ 頭幅(mm)	73.2	74.0	73.6
⑤ 胸囲(mm)	347.8	331.9	339.8
⑥ 胴囲(mm)	373.2	339.4	356.3
⑦ 後右肢長(mm)	106.9	102.4	104.6
⑧ 後左肢長(mm)	106.0	102.6	104.3
頭数	13	10	23

② 雌雄の見分け方

外見から雌雄を判定することは難しいため、捕獲した個体の性器の位置により判定する。

- 雌：肛門と性器がほとんど離れていない。発達した乳房がある。
- 雄：肛門と性器が5～6 cm離れている。



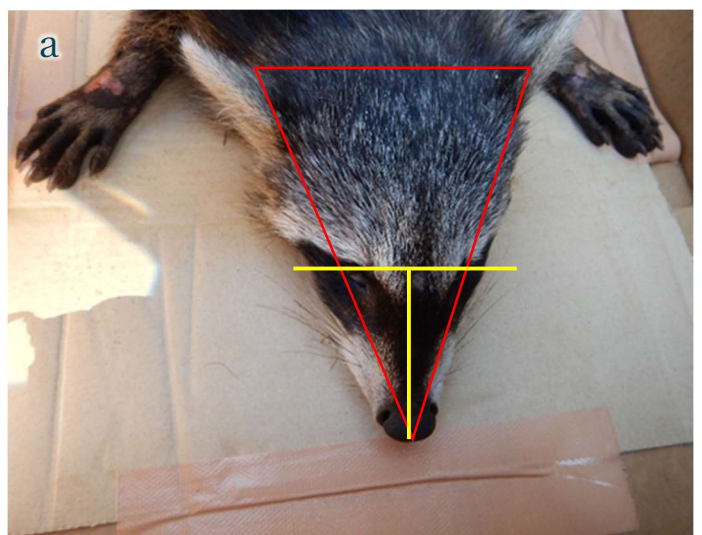
③ 各部位の特徴

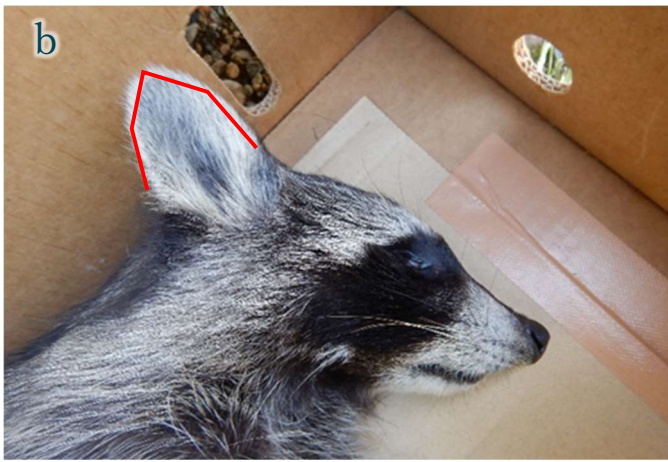
(ア) 頭部

鼻が突き出ており三角形で、耳が大きく発達している。

顔は扁平で15 cmの隙間があれば入り込むことができ、家屋の通風孔や木の割れ目などを通して、外壁と内壁の間や空洞に入り込んで身を隠す習性がある。

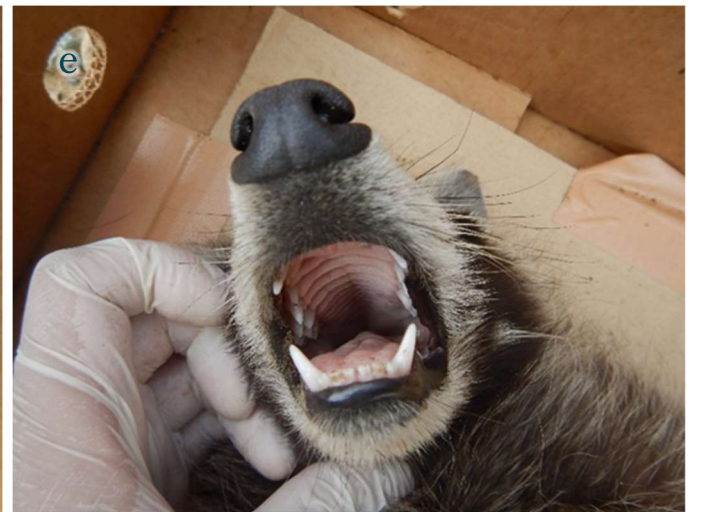
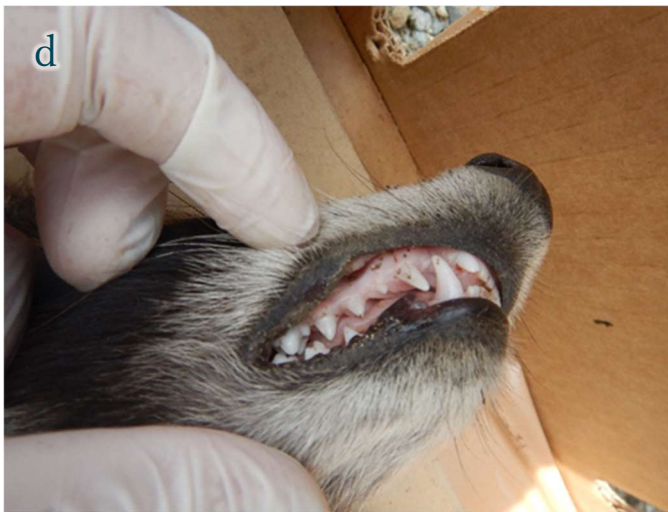
目の周りと鼻筋は黒いT字のラインが特徴的である。(写真a)





耳は大きく先がとがって立っている。(写真b)

歩く姿勢は、頭を地面に近づけて匂いを嗅ぎながらゆっくりと進む。(写真c)



口は比較的大きく目の下まで開いている。(写真d)

哺乳類や爬虫類、昆虫類および植物を広く摂食する雑食性であり、切歯、犬歯、臼歯がイヌやネコと似た形と配置をしている。(写真e)

(イ) 脚部

- 前肢：指と手のひらが細長く、モノを掴みやすい形をしている。
- 後肢：指と足裏が細長く、木や壁を掴んで登るために体重を支えられるような形をしている。





(2) 繁殖特性

山口県萩市小川地区で自動撮影カメラにより捕捉された親子のうち、6月～8月の子供の数は3～5頭であった。また、10月下旬以降には子連れは撮影されなかった。

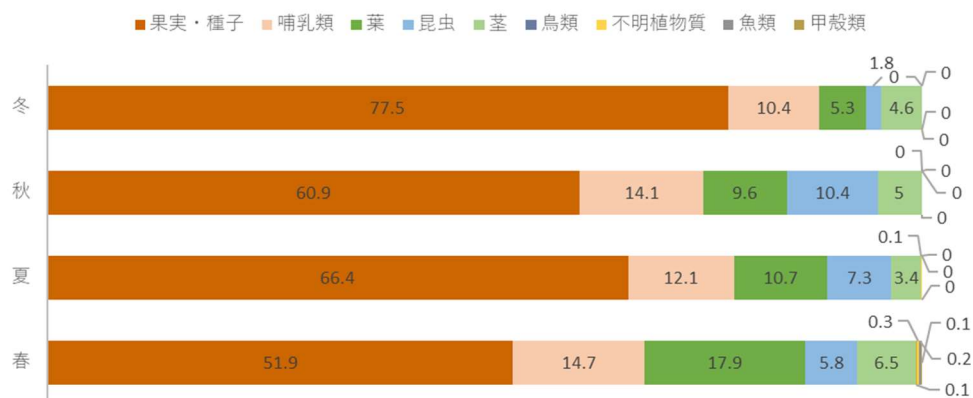


6月～8月の親子での移動風景

(3) 食性(胃の内容物)

横浜市で捕獲された個体群では、年間を通じて果実・種子が最も多く食べられている。続いて、哺乳類、葉、昆虫、茎の順の占有率であり、**雑食性**であるといえる。

季節別の食物の占有率

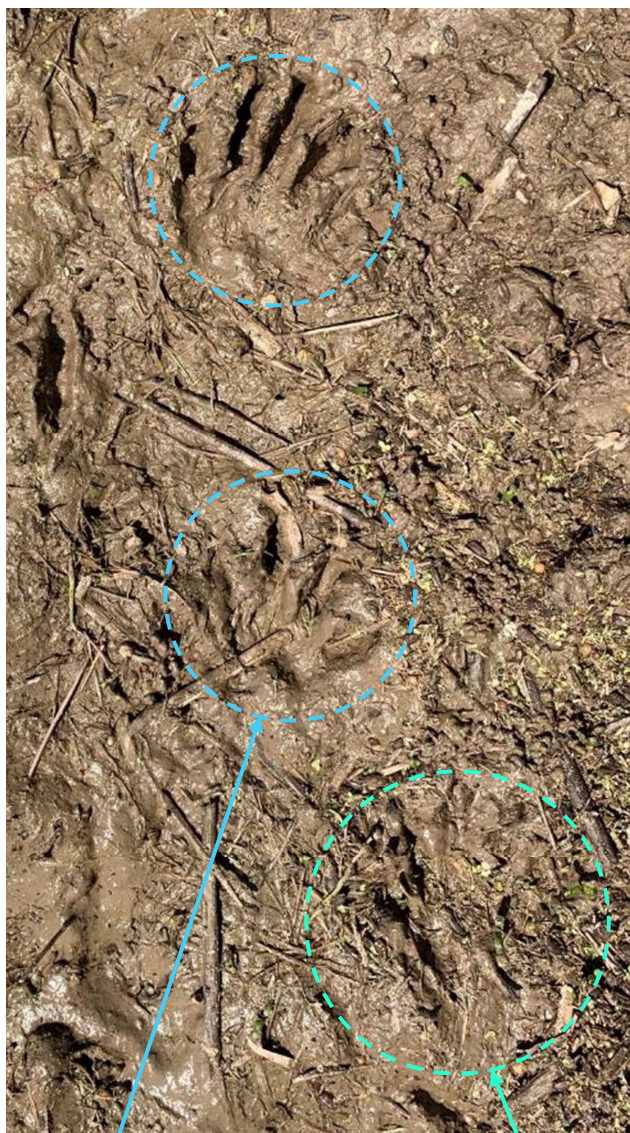


3 事前調査

(1) アライグマの痕跡調査

① 足跡の調査

アライグマは、河川を移動経路に利用し、田んぼやため池で餌を探ることが多いため、水辺の柔らかい土壌に足跡が残っている。タヌキやキツネは肉球が特徴的であるが、アライグマは指が長く人の手形に似ている。



田んぼの端



河川の水際

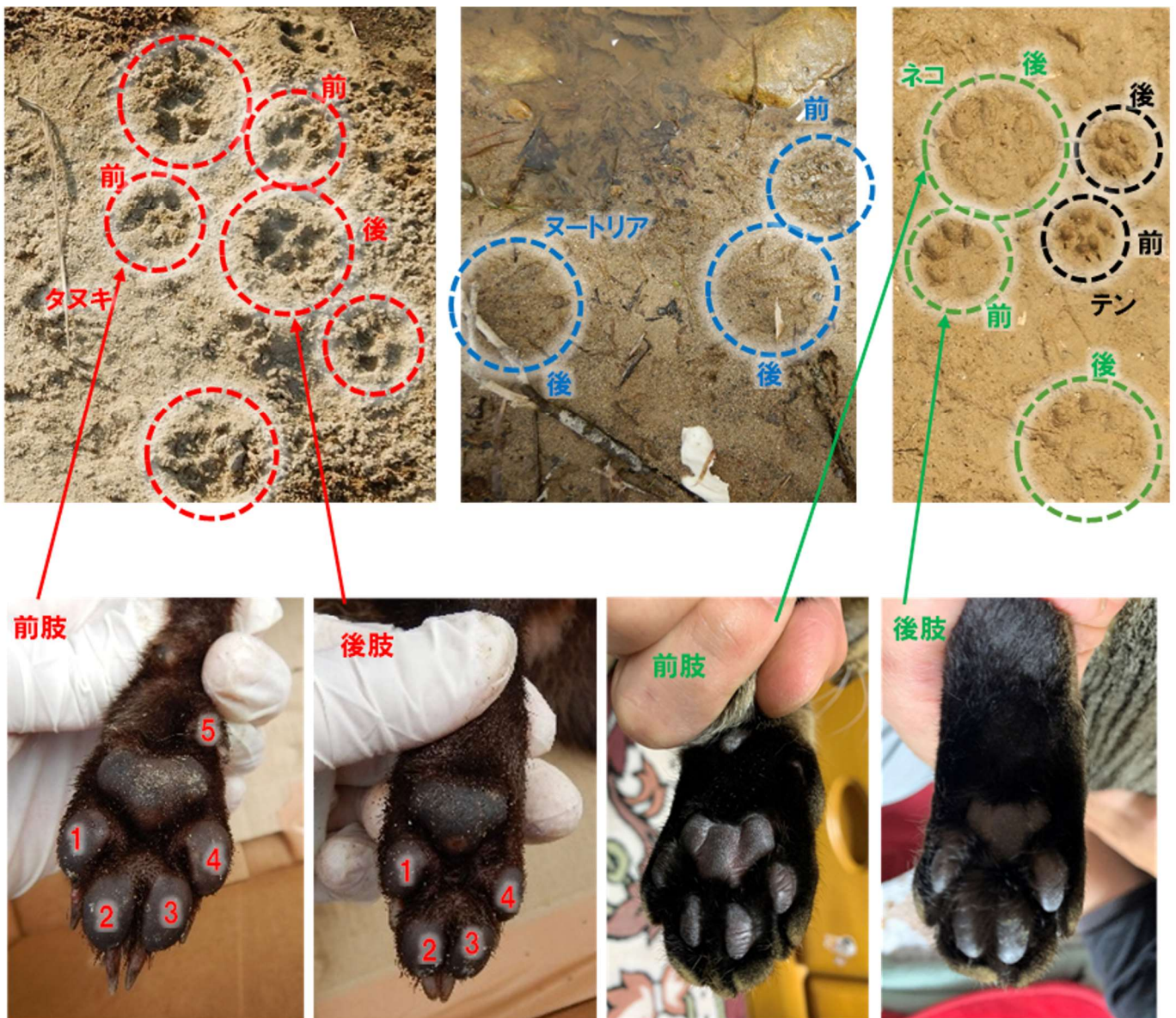


ため池の土



アライグマの前肢と後肢の形の違いを認識すること。

足跡は5本指がはっきりとしており、指が長いことが特徴である。



河川やため池には、様々な獣類の足跡が残っている。これらの見分け方のコツは、動物の形態と大きさを覚えることである。例えば、タヌキとテンの形は似ているが、ネコより極端に小さいものがテンで、ネコと同等の大きさはタヌキであるという具合に、大きさに判断できる。

被害対策を行う前に河川やため池等の周辺の環境を一通り見回って、足跡の新旧や数から利用場所や経路を把握しておくことが重要である。

② 爪痕の調査

アライグマは木や壁を登ることが非常に得意で、家屋の柱や壁、木に爪痕を残すことが多い。

前肢と後肢ともに**5本の指**が人と同じように並んでおり、家屋の柱や木の幹を掴みながら登るので、爪でフックした部分に**線状の跡**が5本並んでいるのが特徴である。

特に、**神社や寺**の本殿の裏側は人気が少ないため、柱に爪痕があることが多い。

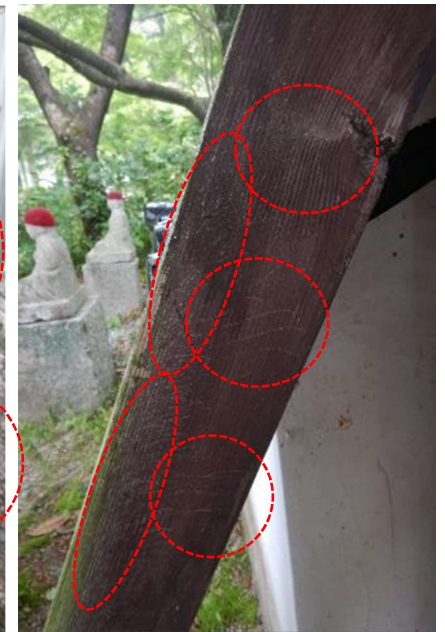
アライグマによる農作物被害が疑われる場合は、近所の寺社を調べることでその存在を確認することができる。



前肢で抱えて登る



木に登る爪痕



寺社の柱の爪痕



前肢でブレーキをかけながら降りるため長い傷ができる



③ 食痕の調査

アライグマは、前肢を器用に使うことができることから特徴的な食痕を残すことが知られている。

特に、果実の皮が厚く、果肉が柔らかい柑橘類は、一部に穴を開けて中身を取り出すように食べる。





果実の外側の皮が薄く、果肉が固いナシやモモ（収穫前）では、樹上にある状態の果皮に食痕が見つかることがある。



畑作物では、トウモロコシを好む傾向があり食害が多く報告されている。

アライグマは、前肢を器用に使い外皮を剥いて全周の実をきれいに食べる。

アライグマのほかにも木に登る獣類として、テンやイタチ、サルが挙げられる。アライグマは、両手でつかんで口を大きく開けて果実をかみ切るため歯形が残る。テンやイタチは前肢が小さく、口を使って果実を取るため爪痕、噛み痕が残ることがある。

サルは、手でもぎ取って持ち去るため痕跡が把握しにくい。

タヌキやアナグマなどは、口のみで前肢は使わず歯でかみ切りながら食べるため、部分的に食べて実を残す。

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構のホームページに、鳥獣害痕跡図鑑が掲載されている。農地で被害が発生した時は、作物毎に加害獣種別の食害痕跡写真を閲覧し、獣種を特定することが大切である。

鳥獣害痕跡図鑑 URL

https://www.naro.affrc.go.jp/org/narc/chougai/sign/index_sign.html

(2) 加害状況の把握

① 加害獣種の把握

自動撮影カメラで被害のある農地内を撮影してみると、**予想と異なる獣種**が加害していることが多い。

アライグマの被害と思い込んで箱わなを仕掛けていても捕まらない場合は、サルやテンによる加害も考慮しなければならない。



木の幹のテン



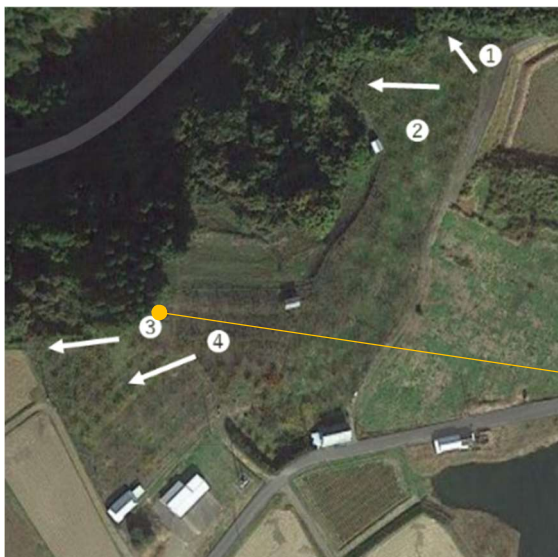
支柱を登るアライグマ

② 侵入場所の特定

自動撮影カメラによる調査は、農作物を栽培している農地の端の**山林や耕作放棄地**に面するエリアで行う。

また、電気柵やトタン柵を設置していても侵入される場合は、突破される場面を撮影することで、改善方法を知ることができる。

侵入されやすい場所を確認し、防護すべき場所と方法の参考とすることができる。



(3) 自動撮影カメラの選定

① 自動撮影カメラとは

自動撮影カメラは、**動物の熱を感知して自動で撮影**するカメラです。無人の状態ですべて「静止画撮影」「動画撮影」「夜間撮影」などができる。

また、屋外での設置・使用を想定しており、気候の年間の変化に耐えうるように頑丈に設計されている。また、基本的に乾電池で稼働するため、設置場所を選ばず簡単に設置できる。

撮影画像には、日時・温度等が見えるように記録されるので、野生動物の生態観察や狩猟の現場でも幅広く活用されている。



② 自動撮影カメラの選び方

(ア) 照射ライトの種類

●不可視光線フラッシュ（ノーグローライト）

人や動物の**目には見えない波長の赤外線**を照射して撮影するので、警戒心の強い動物を撮影したい場合に最適な機能である。

●可視光線フラッシュ（ローグローライト）

撮影時に**少量の可視光**が照射されるため、不可視光線フラッシュよりも明るい画像が撮影される。夜間撮影の際、動物に対して刺激となり警戒される可能性がある。

(イ) トリガースピード

赤外線センサーが動物の熱を感知してから**シャッターを切るまでのスピード**のことをいう。このタイムラグは、短い方が、動物の撮り逃しがないので、動きが早い動物にはトリガースピードが速い機種が向いている。

最低限のトリガースピードは1秒未満である。この値は価格に大きく影響を受けるので、安価な機種を購入するときには注意を要する。

(ウ) センサー反応距離

熱を持つ動物からの赤外線を検知するセンサー反応の**限界距離**のことである。

カメラ機種により 15m～30m 程度の範囲があるが、なるべく遠くまで反応するものが好ましい。なぜなら、外気温と被写体の温度差が小さいときには、反応距離が小さくなることもあるため、遠方の動体に反応しないことがあるためである。

夜間撮影では、フラッシュの届く範囲がセンサー反応距離の限界になるので、カメラの設置角度を水平に向けて遠方を撮影できるように設置に注意が必要である。

(エ) 動画サイズ／画質／撮影時間

動画撮影は、静止画像に比較して情報量が多く、動物の行動特性の詳細確認に非常に適している。しかし、**データサイズが非常に大きい**ため、メディアへの記録に時間がかかり電力消費が大きくなる。

画質は、**センサー感度や性能と画素数**により決まるため、撮影画像のサンプルを昼と夜で比較してバランスの優れるカメラを選ぶようにする。

夜間の撮影時間だけ短く制限される設定の機種もあるので、使用前に仕様と設定方法を確認すること。

(オ) 液晶モニター

撮影した画像・動画は、カメラに配置されているモニターから直接的に視聴することができ、パソコンやスマートフォンにダウンロードせずとも**現場で確認**ができる。

モニターが前面についているカメラは、設置後でも**撮影の画角を調整**しやすい。

4 防除方法

アライグマによる農作物被害を軽減化するためには、防護対策、捕獲対策、生息地管理を総合的にバランスよく行うことが重要である。

(1) 防護対策

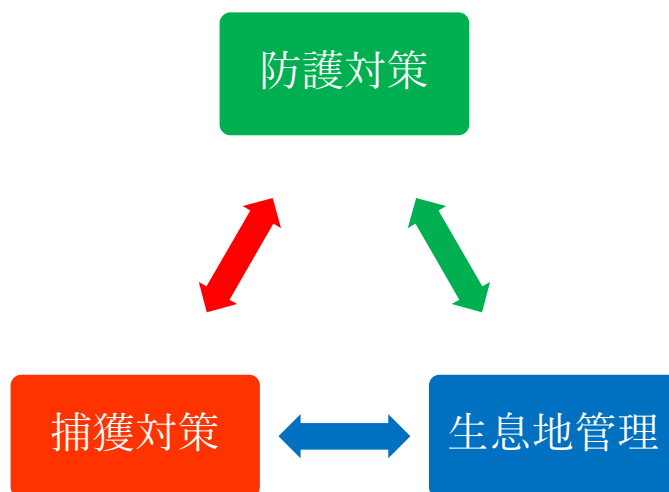
- ・ **防護柵**の設置
- ・ **食物残渣**を残さない

(2) 捕獲対策

- ・ 計画的な**捕獲**
- ・ 河川や廃屋、耕作放棄地での**捕獲**

(3) 生息地管理

- ・ **耕作放棄地**の解消
- ・ 農地や柵周辺の**除草**



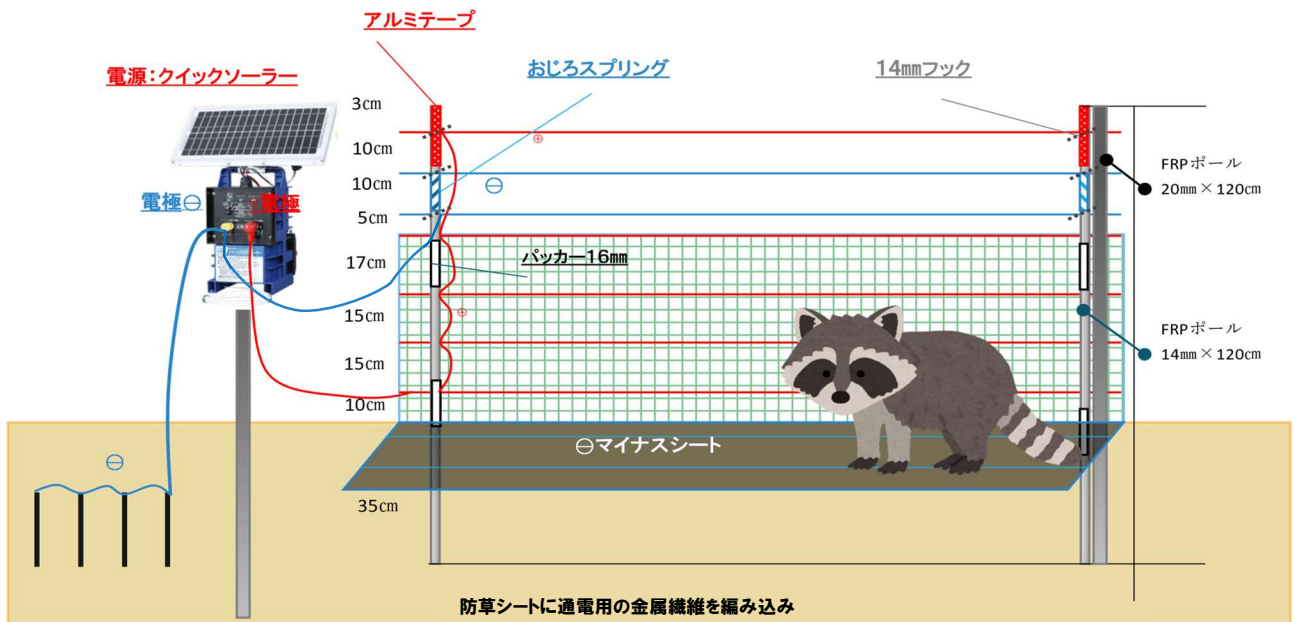
(1) 防護対策

中型獣&サル複合型電気柵(山口市)

アライグマ等の中小型動物の防護には、中小型用のネット電気柵が有効である。しかし、山口県内の果樹産地では、アライグマによる被害が発生する以前から、サルによる被害が多発しており、中型獣とサルを同時に防護する必要がある。

下図の山口市ネット電気柵は、中型獣用ネット柵の上部にサル用の電気柵を組み合わせており、サルがポールを掴む習性を利用することで、すべての獣類の侵入を防ぐことができる。

電源には太陽光発電パネルを設置することで、充電に手間を取られることなく、一年間を通して通電することができる。このことにより、動物の警戒心を高め、出没の頻度を時間の経過とともに減少させることが期待できる。



① 設置場所の注意事項

農地への獣類の侵入方法は2つのパターンがある。

【地上から侵入】イノシシ、アライグマ、タヌキ、テンなど

【樹上から侵入】サル（ネット式電気柵を飛び越える）

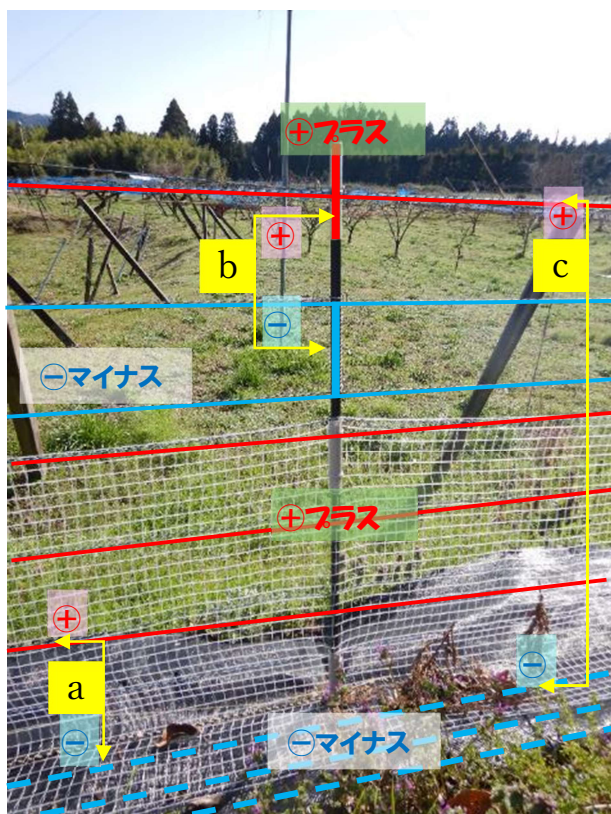
果樹園は、風よけのために防風林やネットが張られている場合が多い。

防風林と防風ネットからのサルの飛び越えを防ぐためには、果樹園全体を防風林および防風ネットの**外側から囲む**ように設置する。



② 電気柵の通電の仕組み

電気柵は⊖と⊕を同時に触れることで電流が流れることで、電気のビリビリという刺激を与える。



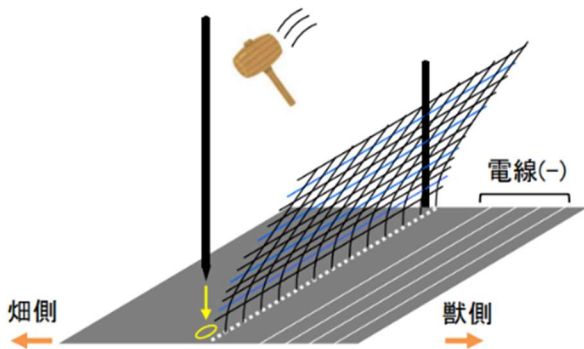
【刺激を受ける条件】

- 動物は地面に必ず触れているため、常に⊖の状態である。鼻で**ネット⊕**を触って危険を確かめる行動をとったとき、通電して刺激を受ける。
- サルは、ポールを手で握って登り、柵の中に入る。**ポール下部分⊖**と**ポール上部⊕**を触れて刺激を受ける。
- 背の高い動物⊖の場合も、ポールの**最上段の電線⊕**を鼻で触れるため刺激を与えることができる。

※マイナスシート：防草シートに**金属の繊維**が編み込まれていて、地面の⊖帯電をシートの上側に伝導する。一般の防草シートは、ビニールなので⊖帯電できないため、電気刺激を与えられない。

③ 設置方法

(ア) 支柱打ち込み



①支柱を打ち込む深さ

→約25~30cm

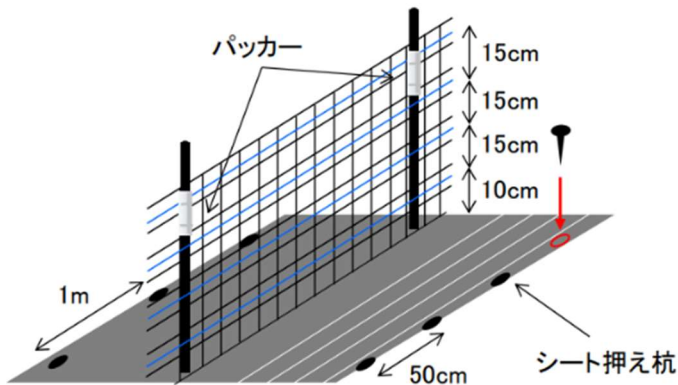
②支柱を打ち込む間隔

→約2m

ポイント

防草シートは、
電線(-)が入っている側を獣側に！

(イ) シート押え杭・パッカー取付



①獣側は50cm.畑側は1m間隔に
シート押え杭を打ち込む。

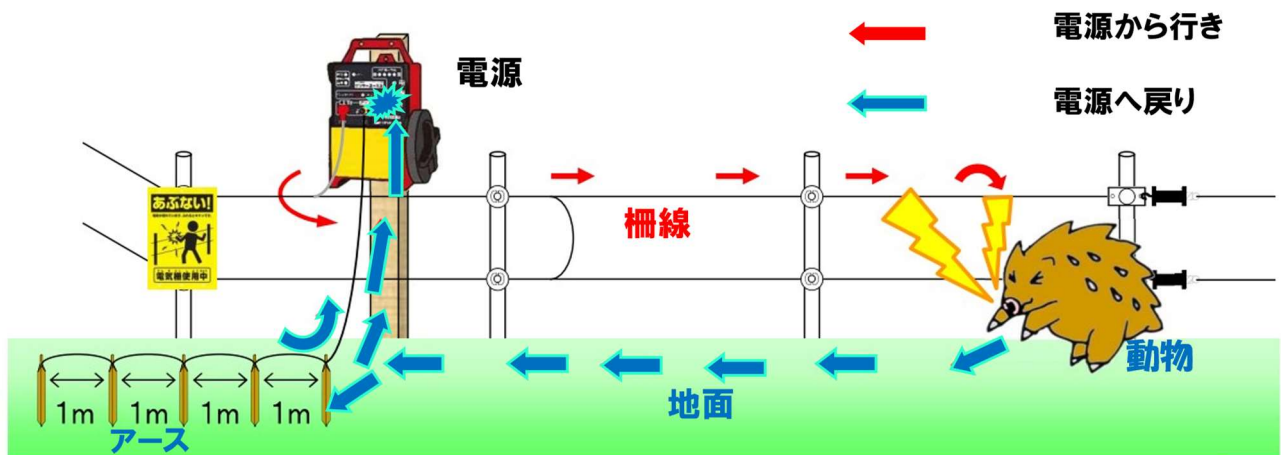
②パッカーを使いネットを固定する。
→上部1箇所OK！

④ マイナス(アース)棒の取り付け方法

(ア) 効果の決め手はアース棒

電気が地面から電源へ戻らないと電気は流れない。

動物の足から地面に帰った電気を、アースを使って電源に戻す。

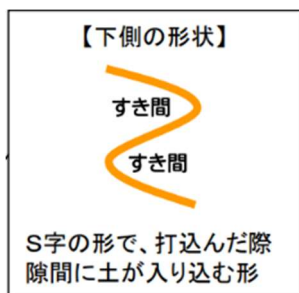


(イ) アース棒の打ち込み

打ち込み方向があり、配線がついている方が上側（たたく側）。

何もついていない方が下側（地面へ差し込む側）。

下側の断面の形状は、土が隙間に入りやすいようにS字になっている。



(ウ) 効果的な設置方法

溝を15cmの深さで6～7m掘って、溝の底にアース棒を打ち込む。

完全に打ち込み切ったから、溝に土を戻してアースを埋めてしまう。

草刈りの際に、アース線を切らないための予防策である。



⑤ 電源および出入口通電

電源がない圃場でも、太陽光発電式の電源であれば、メンテナンスフリーで一年中電圧をかけたままにして、警戒心を解かずに侵入を防ぐことができる。

また、出入口を設置することで、電源を切ったり入れたりする手間を省くことができる。



⑥ 設置時間および仕様

設置作業時間は、実証圃の周長約 300m を 6 人役× 6 時間ほどで完了できた。冬季の雑草が少ない時期が設置作業に適している。

ネット電気柵は、電線による柵に比較して、漏電防止のための点検、張り直しや除草作業などのメンテナンスにかかる費用と手間が小さい。

マイナスシートは、防草シートに金属繊維が編み込んでおり、確実に通電させることができ、漏電防止のための除草作業を軽減できる。

これらをすべて含む資材一式の令和 2 年度の製品価格は、約 1,100 円/m であった。
(※海外情勢により変動)

電気ネット式＋上部電線3段(サル用) 複合型電気柵 実証③ 周囲273m 出入口4か所

	品名		数量
本体＋接続	クイック3300ソーラー	7段	1
	電極結線	1本/1圃場	1
	マイナス接続コード	1本/本体1台	1
ネット関連資材	電気式ネット	50m巻き	5
	マイナスシート	60cm幅 50m	5
	ネット止め杭	1個/m	227
	シート押さえ杭	2個/m	454
	通電テープ	20m巻き	1
電線等固定部材	FRPポール14mm×1.2m	1本/2m	114
	パッカー 16mm	2個/2m	228
	14mmフック	3個/FRP14mm 1本	342
	おじろスプリング14mm	1個/FRP14mm 1本	114
	アルミテープ	10m巻き 10cm/2m	2
支柱補強用	FRPポール20mm×1.2m	1本/50m 補強用	5
	バインド線40cm50本束	3本/FRP20m 1本	1
電気さく線	ゲッターコード300m巻	300m巻き 3段	3
出入口部材	ゲート3型	3個/400m	12
	FRPポール14mm×0.9m	出入口1箇所	4
	パッカー 16mm	出入口1箇所	8

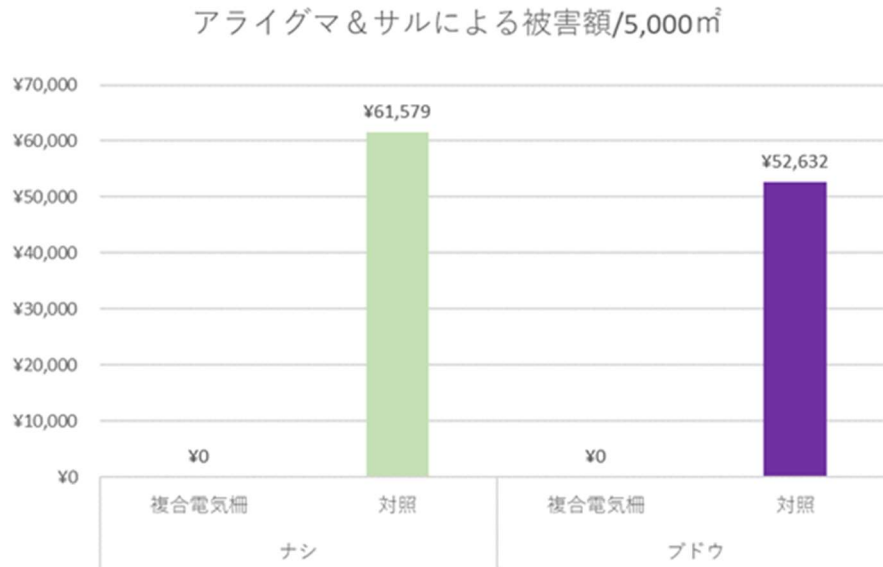
⑦ 実証試験結果

2年間の実証試験では、電気柵の設置区は被害がゼロであった。一方、設置していない農地では、食害が多く報告された。

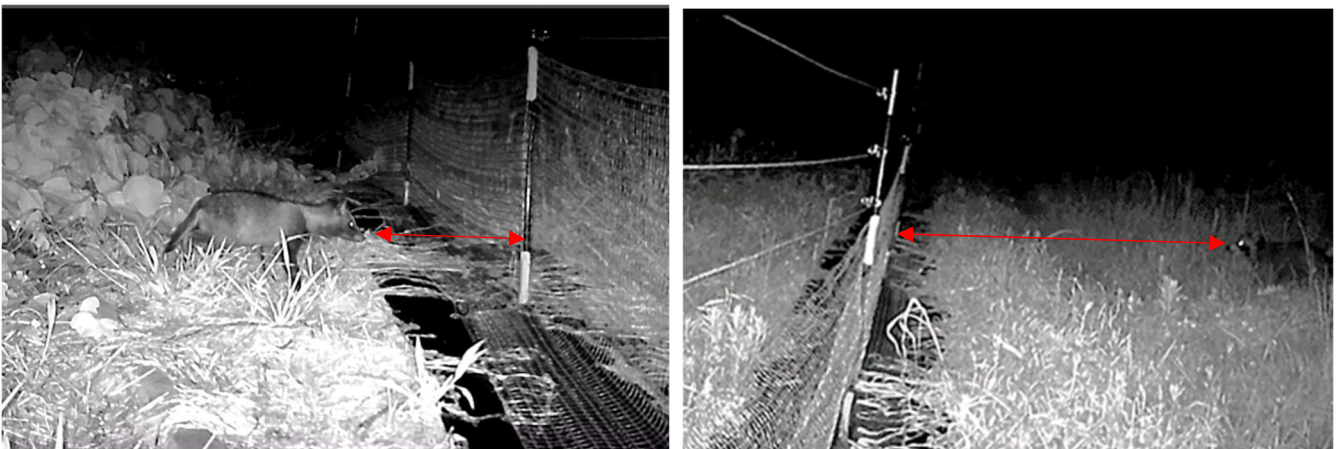
電源については、太陽光発電のみでの稼働を確認できており、充電にかかる手間を省くことができた。

他産地における設置後の耐久年数は、10年程度である場合が多いようである。

実証園地では、被害額が減少し、獣害対策のための精神的な負担が軽減されたとの評価を受けており、持続的な経営のために有用であると考えられる。



周辺を回遊する獣類は、ネット柵に触れないように警戒しながら防草シートの外側を迂回して移動しており、十分な防護効果を確認できた。



(警戒するタヌキとアライグマ)

(2) 捕獲対策

① 捕獲方法

(ア) 中小型獣用の箱わな

踏板式、吊り餌式のどちらでも捕獲が可能である。操作性は踏板式の方がより簡単である。設置者が使いやすいと感じる方を選択するとよい。



踏板式



吊り餌式

- 価格：1～2万円／個
- 大きさ：奥行60～80cm、幅25～40cm、高さ25～40cm
- 重さ3.5～5.5kg

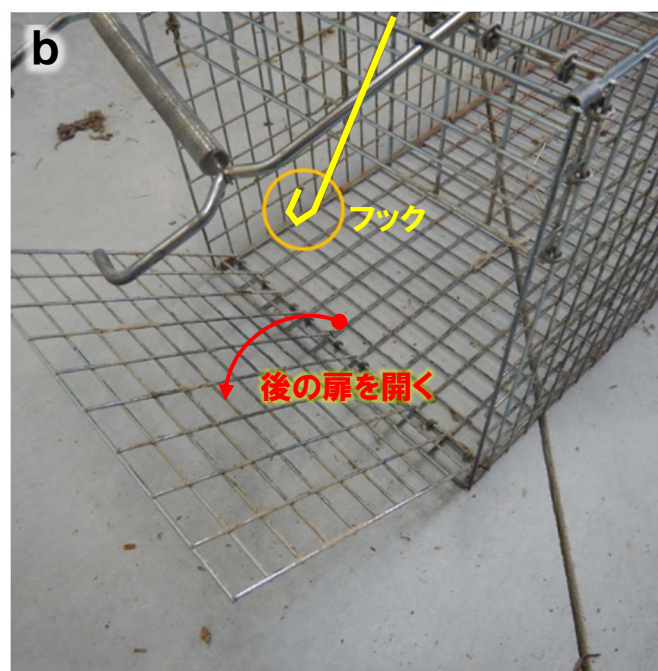
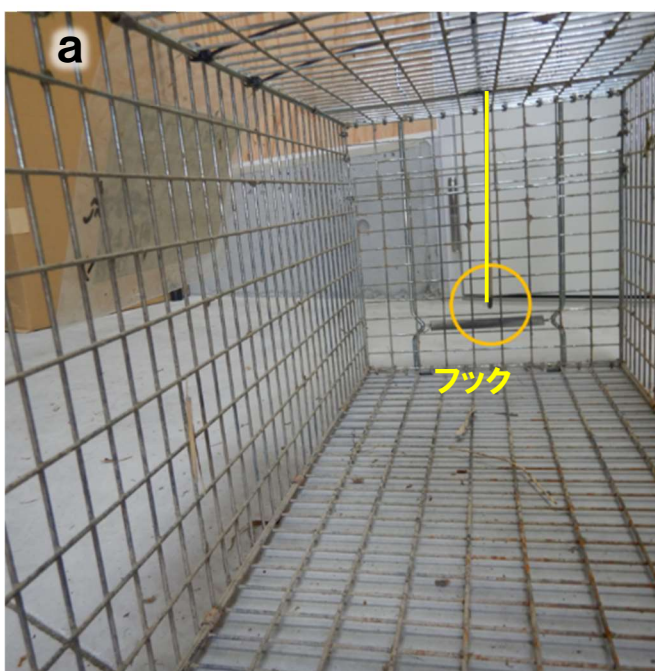
(イ) 踏板式箱わなの仕組み

- 箱わなの一番奥に**踏板**が設置されており、踏板に体重がかかって押し下げられると、踏板の下の**金属の棒**が下がる仕組みである。(写真a,b)



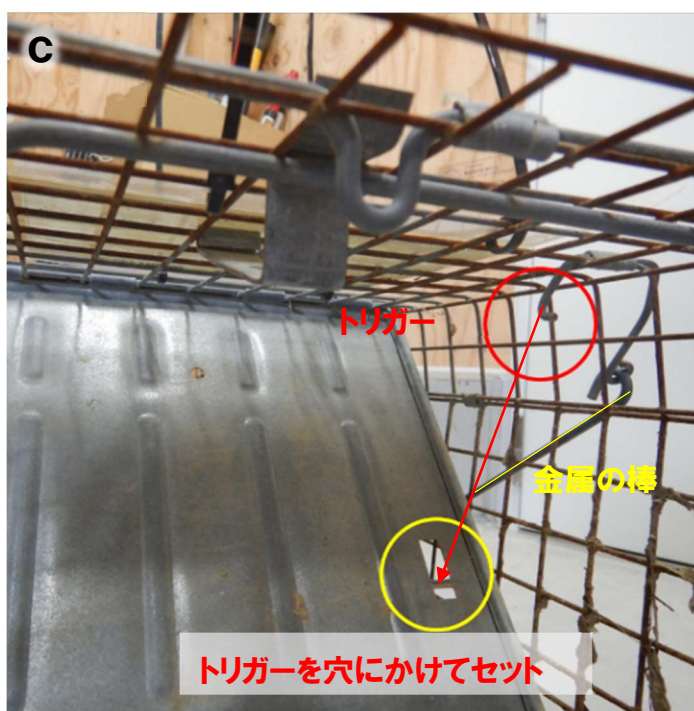
- **金属の棒**は入り口側の**トリガー**に連結しており、蓋の**フック穴**にトリガーをひっかけて、入り口の蓋を開けてセットする。（写真c）
- **踏板の奥**に大きな餌を置き、手前に小さく薄く餌をまく。わなの**外**にも薄く餌を撒くことで**誘因**する。
- 動物がわなの奥の餌を食べようとして奥へ入って**踏板を踏む**と、金属の棒が押し下げられ、フック穴の**トリガーが外れ**て蓋が抑えに押されて勢い良く閉まる。
- 動物は、**お尻側**の蓋が閉まるので反応できず、逃げるできない。

(ウ) 吊り式箱わなの仕組み



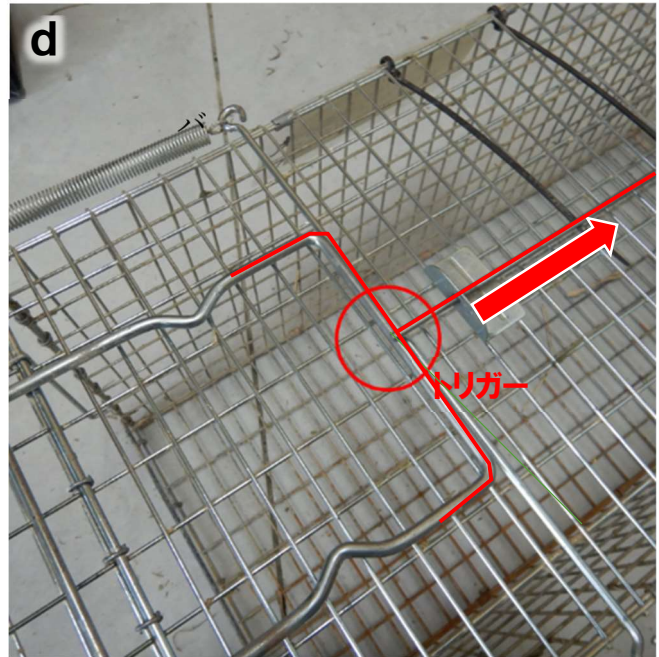
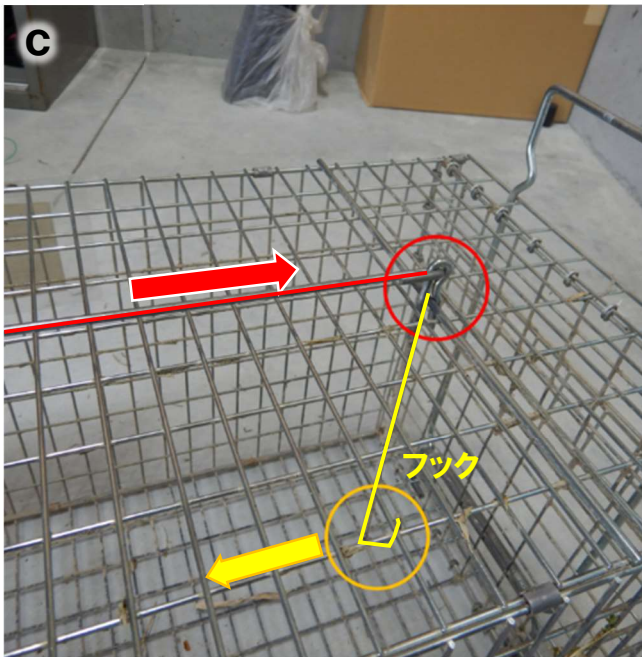
- 箱わなの一番奥に餌を掛ける**フック**が天井から吊り下がっており、**餌を引く**とフックが手前に動く。（写真a）
- **後ろの扉**を開くとフックに餌を掛けやすい状態になり、**餌を突き刺して**しっかりと固定する。（写真b）

- **連結部**はテコの原理でフックと反対の**奥側**へ引っ張られる。箱わなの上側の金属の棒が奥側へずれる。（写真c）



- 蓋の**トリガー**が外れると側面のバネが縮んで入り口を勢いよく閉める。（写真d）

- 動物は、餌に夢中になっており、お尻側が閉まるため反応できない。
- 餌は、大きなものをフックに仕掛け、小さいものを奥側から外側に薄く散らして誘因する。



② 捕獲期間

(ア) 6月～11月に集中的に捕獲

気温が高くなり植生量や昆虫数が多く、小型哺乳類の活動が活発になる時期に食欲が旺盛になり**捕獲数が増える**。メスは4～5月に出産し、この時期に授乳と子育てをするので餌を探す必要があり行動範囲が大きくなる。オスは、繁殖相手を探してより広い範囲を動き回るようになる。

(イ) 12～5月は捕獲効率が低い

冬季は、納屋や廃屋の中に籠るようになり、その周辺から動きにくくなる。特に、妊娠しているメスは行動範囲が極端に小さくなる。活動量を落として、カロリー消費を抑えるため、食欲が低下し**捕獲が少なくなる**。

③ 捕獲場所

アライグマを効率よく捕獲するためには、警戒心が弱い場所を選ぶ必要がある。そのような場所では親子で餌を探しに来るため、連続して捕獲することができる。箱わなや専用わなを設置する際には、10m～20mの間隔をあけて3個程度を基準とすることで親と子供をまとめて捕獲することができる。

【設置ポイント】

- 人から見えない、近寄れない（人を最も恐れるため）
- 河川内の茂みや橋の下（移動のほとんどに河川を通る）
- 廃屋や耕作放棄地（周りの空間が開いていると警戒心が強まる）
- 廃屋や河川の側で山林を背景に抱える場所



④ 捕獲用の餌

住宅や商業施設などが密集する都市部では、人間の生活に関連する食べ物に執着する傾向がある。一般的には、**ドッグフードや甘い菓子**が用いられる。

農業被害が大きな果樹団地の周辺では、被害を受けている果樹の種類と同じ果物で捕獲されることが多くなる。ただし、農業被害を受けている果物を餌にすると、捕獲されなかった個体群がその果物に固執する可能性が高くなる。そのため、**第一に防護柵を設置**して農地に侵入が困難な状況を作り、次に農地周辺の**柵の外側**で捕獲を進めると効率が良い。

雑食性の獣類は、食性が似ており**間違っ**てわなにかかることがあるため、周辺環境によって餌を選ぶ必要がある。

餌の種類	嗜好順位	錯誤捕獲
タンパク質（甲殻類、鶏肉）	5	多い（タヌキ、キツネ、ネコ、テン）
果樹（ブドウ、モモ、ナシ）	4	やや少ない（テン、タヌキ）
甘い菓子（コーン菓子、餡ドーナツ）	3	やや多い（タヌキ、テン、ネコ）
ドッグ・キャットフード	2	多い（タヌキ、キツネ、ネコ、テン）
残飯（ご飯、みそ汁、おかず）	1	やや多い（タヌキ、ネコ、テン）

⑤ 慣らし期間

アライグマは、河川を中心に広い範囲を行き来している。わなの周辺に戻ってくるまでに数日から数週間かかる。そのため、わなとその周辺への撒き餌を他の獣類が食べてしまうため、常に餌を補充し**慣らし期間を2～3週間とる**。慣らし期間は、生息数が多い中山間地では短く、密度の低い都市部では長くする。

箱わな周辺の撒き餌を食べ始めてから、**箱わなの中の餌まで食べる**ようになるまでを慣らし期間とする。

アライグマは、タンパク質類を好むが、ネコやテン、タヌキの**錯誤捕獲**が多くなるため、肉類を避ける。夏季は、子供を連れていることが多いため、警戒心の低い子供が捕獲されやすい。

- 慣らしの2～3週間は、箱わなのトリガーを固定して自由に出入りさせる
- 餌は、周辺に薄く、わな内に厚く撒く
- 餌を食べ残しが多いときは場所を変更する
- わなは毎日見回りをし、捕獲後はすぐに処分する
- わなは転倒しないように、ペグで地面に固定する

⑥ 捕獲後の処分方法

動物に苦痛を与えないために二酸化炭素による窒息死による処分が望まれるが、現場の状況によっては刺殺、感電死など臨機応変に対応する。

【二酸化炭素の処理方法】

- わなの中に手を入れないようにして安定した場所へ移動させる
- 二酸化炭素などにより、できるだけ動物に苦痛のない方法で安楽死させる
- 市町の焼却場に確認して持ち込み処分する



二酸化炭素ボンベ

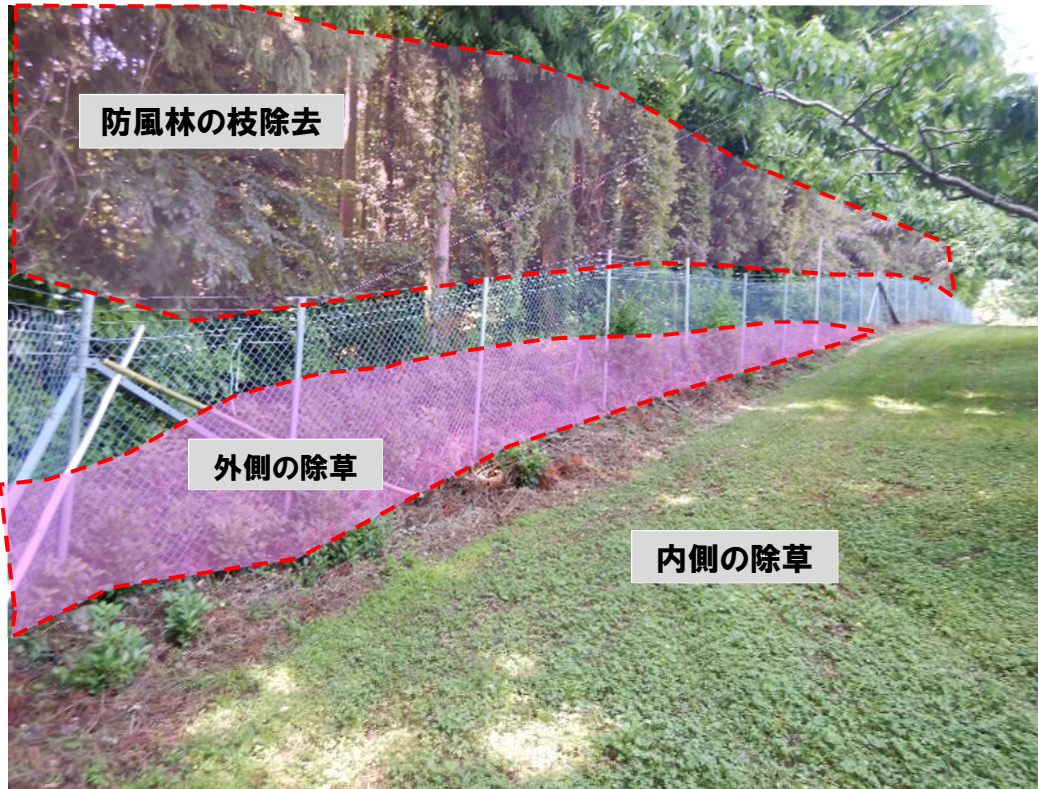


わなごと入る密閉容器

(3) 生息地管理

① 防護柵と隣接する防風林

農地周辺の見通しをよくするため柵の内側はもちろんのこと、柵の外側とその周辺まで含めて除草する。サルがいる場合は、防護柵の外側にある防風林は枝を除去することで飛び込みを軽減する。



② 低い電気ネット柵の内側の樹木

サルも同時に防護する場合、農地内の樹木への飛び移りの可能性があるため、低い枝を除去する。



③ 廃屋の周辺の手前刈り

廃屋に棲みつく可能性が高いため、農地近くであれば植物を除去する。見通しをよくすることで警戒させることができ、棲みつく可能性を下げる。



5 関連法律

(1) 特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律

- ① 特定外来生物は飼養、保管又は運搬、輸入などが規制されている。
- ② 特定外来生物の捕獲や侵入対策により、生態系被害の防止、生物多様性の確保、人への被害の防止、農林水産業への被害の防止を勧める。

(2) 鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律

- 鳥獣の保護を図りつつ狩猟、捕獲などにより生物多様性、環境保全、農林水産業への被害防止を勧める。

- 「狩猟による捕獲」

狩猟期間が定められ、狩猟免許を所持して狩猟者登録を受ける必要がある。

- 「許可による捕獲」

生活環境や農林水産業への被害防止、鳥獣の保護目的、学術研究の目的で、環境大臣または都道府県知事の許可を受ける必要がある。

6 引用文献

高槻 成紀・久保 昌彦・南 正人. 2014. 横浜市で捕獲されたアライグマの食性分析例. 保全生態学研究. 19: 87-93